

アメリカの劇作家最新動向とリージョナルシアターの成果を伝える、日米共同“朗読”公演

東京国際芸術祭 2006
アメリカ現代戯曲&劇作家シリーズ
ドラマリーディング vol.1
2月10日～12日にしずがも創造舎特設劇場

『ベラージオ』作：マック・ウェルマン／演出：中島諒人
『アクト・ア・レディ』作：ジョーダン・ハリソン／演出：江本純子
『メイヘム』作：ケリー・スチュアート／演出：宮崎真子
『セックスハピッツ・オブ・アメリカンウイメン』作：ジュリー・マリー・マイアット／演出：中野成樹



ベラージオ 撮影／松嶋浩平
※但し『セックスハピッツ〜』はTIFスタッフ撮影

公民権運動の高まりと共に60年代全米各地に続々と誕生したリージョナルシアターは、70年代には主要都市に設けられ、アメリカ演劇の裾野を支える拠点となった。これは地域の会員によって支えられる非営利の団体によって運営される組織で、ディレクターたちによって選ばれた作品が、紹介・上演される。現在このシステムの中で仕事を続ける全米の劇作家は約550人、現代アメリカのシアスな戯曲作品の多くがこのシステムの中で誕生し、ブロードウェイほかメジャーな演劇シーンを支えるバックグラウンドにもなっているという。

本公演は今後3年間展開されるプログラムの第一弾。ドラマリーディングといっても朗読による“試演”、単なる戯曲朗読のような公演ではなく、各作品は1本の演出家によりそれぞれ“日一杯”の趣向をこらし上演された1作品の



アクト・ア・レディ

うち3つを見た

「アクト・ア・レディ」はピアノとミラーボールの設えられたステージの、音楽を駆使するキャバレー的演出。舞台は1950年代のアメリカの田舎町。従順な人々の暮らす平和な町で3人の男が女装して演劇を公演することになり、それぞれが心の中に持っていた女性性や人格の裏面が表出……同性愛やジェンダーという現代文学のテーマが50年代のアメリカの田舎町に展開される。やがて現実世界との境界が曖昧になる劇中劇が重要な要素である作品が、それ自体がメタシアターの要素を持つドラマリーディングで“公演”されるわけで、入れ子構造がこんがらがって来る。江本の演出はそれを楽しいショーに仕立てた。

「メイヘム」はよく訓練された俳優たちによる、“演劇”としてはとんと完成する一歩手前といったよい上演。9、11の一年前、アメリカの平凡な主婦が、女性活動家の友人や、中東で活躍する戦場カメラマンの影響で、自分の「何もしない」生活に疑問を持つようになりやがて事件が。主婦の社会参加や中産階級の日常への疑問を掲げた社会派ドラマのようでもあり、夫婦の葛藤と妻の恋を描いた心理ドラマのようでもある。

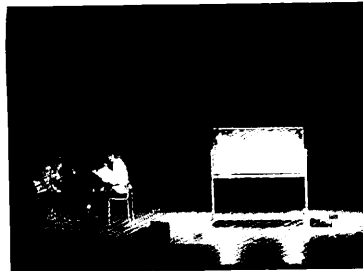
「ベラージオ」は、未来派の栄光と熱狂、そして崩壊をモチーフに、20世紀を今までにない視点で問い返す野心的な戯曲作品だ。未来派は20世紀初頭、前世紀の非合理と伝統的な美意識を嫌悪し、科学万能主義を謳い機械文明への偏愛を掲げた芸術運動。産業革命直後のヨーロッパ全域に熱狂的に受け入れられる。作家たちの天才と芸術の無限の可能性を信じて疑わなかった未来派はやがてイタリアでファシストと接近、崩壊していくが、ダタイズムや構成主義、そしてロシア革命にさえ影響を与えた。マック・ウェルマンは、異端として歴史の

外に放って置かれていた、未来派を取り上げ、ファシズムに同化していった「20世紀」を解題していく。それは現在のグローバル化や国境を超える価値の一元化とも近似している。国境を越える熱狂と新しい思想の栄光、20世紀の

有頂天。それはや

かて、芸術として思想として革命やビジネスを巻き起こしなから時代を形成し、やがてファシズムや戦争、今日の世界に取敵する20世紀の「夢」だったろう。

演劇は、劇作家と演出家と俳優としてスタッフの分業によって近代化した。20世紀初頭モスクワ芸術座からはじまったこのシステムが、最も機能している国はアメリカだ。スタニスラフスキーシステムから発展したmethod actingによる俳優養成とこの“分業”がアメリカの、そして世界中の商業演劇を支えている。そこで生産される作品は、戯曲に記述可能な演劇である。「純粋に劇作家」という職業はこのシステムのなかで成立する。



セックスハピッツ・オブ・アメリカンウイメン

ところがこの“分業”をやめたところで発展してきた日本の現代演劇は「上演」それ自体と不可分なもので、ドラマリーディングとはいっても必然的に演出家の演劇観が空間化されたものとなる。この日米の演劇システムのギャップが興味深く空間化された公演だった。どちらがいいのか判断するような立場にはないが、興行に直結しないところで生産され、観客ではなくディレクターに選ばれていく戯曲は文芸的技巧と洗練に偏り、ある種の作家的権威を纏っていくのか!という私の偏見を「ベラージオ」は心地よく裏切ってくれたということ伝えておきたい。(前嶋知明)

自分達の同年代が演じた、ひとむかし前の日本の物語に客席のおにいちゃんも共感した。

WANDERING PARTY 「21世紀旗手」
2月17日～19日 タイニイアリス

ここ数年、「同年代」ということに興味がある。学生時代は、どうしてもミーハーな気持ちも手伝って、年長者の活動ばかり追っていた。それは単なる「とりまき」に過ぎない、と気づいたのは、特にきっかけがあったわけではない。ただ、ふと見渡すと、相撲取りもサッカー選手といったスポーツ関係の人たちは年下だし、美術作家も演劇関係者も同じ年代の人が活躍をしていた。文学の世界は……と思っていた矢先、2月17日～19日にタイニイアリスであった、wandering partyの「20世紀旗手」を見た。

wandering partyは、2001年に京都で結成された劇団。とはいえ、まったく関西弁は出てこない、関西ギャグも見られない、至極見やすい演劇だった。すぐさま、私は彼らの世界に入り込んでしまった。主人公の太宰治は、戦後の混乱した社会



の中で芥川賞を逃してしまう。選考委員で長老の志賀直哉、同世代の壇一雄、年下の三島由紀夫、「私を買ってください」とiPodを携えてやってくる女学生、現実逃避する太宰治という夫を探す妻など、多くの登場人物が出てくる。そう、周りに協力者はいない、太宰のように、名が知られるほど名誉欲や金欲が高まり、不必要なとりまきが増えていく、と私は某現代美術作家を想いながら舞台を見る。ストーリーはバー・ルバンを舞台に進んでいく。アメリカの言いなりになる日本、ニューヨークのテロの報道、戦後を知らせる玉音放送。「絶対」と言える、すべての人に降り注ぐ抗えない現実。それに加えて、文壇の世界で生きていくことの苦しさ、戦後の復活を果たせようとする社会から見放されたような現



実社会など、あらゆる矛盾が太宰を襲う。世の中は複雑なコトが絡み合ってきている。そして複雑な人間関係も絡み合っている。「ああ生きていくって大変!」と感じる現実から、純粋な太宰はお金を持ち逃げする行為で逃げていく。そして自分のことを理解してくれる人は、同世代の人しかいない。太宰と壇のように、悪友であり親友でもある関係は必要だし、太宰と妻のように、信頼を寄せ合っている関係は必要だ。こうしたストーリーの作りこみの深さは、初めて見るwandering partyの良さであろう。時代を超えても、ジャンルは違っても、交友やつながりは、ふだんの私が感じていることをなぞっているようで共感できた。そして隣のキャラ系のおにいちゃんも、ため息や驚嘆を上げていた。東京進出を果たしたwandering partyの毘に、みんなハマった時間を過ごせた。

(カットイン美術担当・藤田千彩)

虚構性と現前性がパフォーマーの身体に同居する。 指輪ホテルのナイトメア、再び。

初演が10年前だという指輪ホテルの出演パフォーマンス『Please Send Junk Food』（お菓子をお送り頂きたく）が、取手アートプロジェクト（TAP）招聘公演として寒空の野外で上演された。そこで繰り広げられたのは、当日パンフに「ドーナツ・ブラとカートゥーン・ドレス（漫画原稿をあしらったもの）をまとった女優陣が会場内を練り歩き、漫画のセリフを観客と読み上げあうなど、にぎやか要素中心のスイートなナイトメア（悪夢）パフォーマンス」と謳われていたように、台詞や物語よりも、露出度の極めて高い衣装を身に纏った（若くて綺麗な女性パフォーマー）が全裸になるまでのパフォーマンスであったが、それは香気を伴う露出した肌・光と音楽が彩る空間を走り抜けていく身体それ自体が出来事と化していくような明るく躍動的な魅力を兼ね備えた、夢のような一時であった。

会場となったのは、奥に旧茨城県学生寮が控えた文字通りの原っぱで、手前に位置する建物から張り出したテラスのようなスペースがさしあたりの舞台になるのだが、実際には暗闇の原っぱであろうが客席の間であろうが、スポット・ライトに照らし出される（若くて綺麗な女性パフォーマー）の駆けてゆく軌跡＝肌

身体が存在する場所の全てが舞台と化していく。身体技巧やアンサンブルの華麗さをおよそ指向しない肌・身体は、冒頭で「脱くこと＝恥ずかしいこと」というコードを導入しながらも隠すべき肌を露呈し続けることで、記号化された性を（演じるというより）体現しながら表層の肌の内面を浮上させる。つまり、肌そのものが、羞じらいを抱えながら自己表現を成立させていく原動力なのだ。そして、肌を1つにつなぎとめる身体を携えた（若くて綺麗な女性パフォーマー）は

胸をみせ、ついには（背を向けながらではあるが）全裸にまでなるのだが、こうした一連のパフォーマンスは（いま・ここ）にある実在というよりは表象として視覚＝映像へと還元されていく。しかし、他方では演劇という虚構の規則に土足で踏み入るような仕方（いま・ここ）の身体が現前されていく。具体的には、舞台を足早に駆け下りる（若くて綺麗な女性パフォーマー）は客席の間に入り込み、香気の高い肢体を至近距離にさらし、透明のコートに一部コラージュ状にあしらわれた漫画の切り抜きを観客と一緒に読み合わせたり、透明のブラジャーに挟み込まれたドーナツを観客に手渡す、といった相互コミュニケーションが繰り広げられるのだ。つまり、（若くて綺麗な女性パフォーマー）の肌・身体が織りなすパフォーマンスは、観客にとって、安全無害な表象としてエロティシズムを喚起しながら、併せて（いま・ここ）にある生身の体としての疑いのない実在でもあるのだ。

こうした眩暈を誘うような遠近感、演劇向きではない会場＝空間構成とも緊密に連動している。閉ざされない夜空の下、水平方向に見通しの利く空間は、パフォーマンス・エリアを開放しながら（若くて綺麗な女性パフォーマー）を（遠い表象）に位置づけ得ると同時に、観客を制度的役割から解放した上で（近い現前）としての存在も可能にする。さらに、（若くて綺麗な女性パフォーマー）の肌が生成・喚起していく意味でキッシュな記号群（若い女性という個人／群像・ファッション・性 etc）もまた、こうした錯綜した遠近法の中で、すぐれてバーチャルな風俗絵図を描き出すと同時に、あまりに生々しくもある。

一見、過激とも評し得るこうしたスピード感溢れるパ



フォーマンスは、しかし（若くて綺麗な女性パフォーマー）が闇夜に紛れていく時、「もっとみていたい」という痛切な郷愁を誘う。観客は、その時はじめてパフォーマンスに幾重にも重ねられた遠近感を狂わせる奇妙な二重性こそが、（若くて綺麗な女性パフォーマー）の肌／身体を矛盾と同時に成立させ、その緊張関係においてのびやかに描き出された夢が明滅する幻であったことに、気づく

（松本和也／日本近代文学・演劇）

『Please Send Junk Food』とは？

1995年初演。映画『猫耳』のオープニング・パフォーマンスとして上演。ドーナツ・ブラとカートゥーン・ドレス（漫画原稿をあしらったもの）をまとった女優陣が会場内を練り歩くスイートなナイトメア（悪夢）パフォーマンス。初演から10年。出演パフォーマンスとしてリニューアルされた。

2005年 7月1日アサヒアートフェスティバル@アサヒアートスクエア 7月2日楽バンク団『うたのはた』 8月6日Beppu Project@別府ブルーバード劇場 9月2日劇団とくごん東京公演イベント@葛飾・青砥やくしん延命寺境内特設テント 11月19,20日取手アートプロジェクト

日本とフランスの怪優たちが見せる現代の涅槃図絵。 ～die prätze M.S.A. collection

M.S.A.collection 参加作品 東京戯園館プロデュース
『蒼穹（そら）はない』（A・アルトー原作）
4/21（金）19：30 4/22（土）19：30 4/23（日）18：30
◎麻布ディブラツ
前売 3000円 当日 3500円（学生 500円引き要学生証）
問 = 03-3416-3170
演出＝ディディエ・マニュエル 出演＝ディディエ・マニュエル 高田恵篤 渡邊敬彦 工藤文輝 他
後援＝笹川日仏財団

一昨年、イスラエルの劇団とのコラボで話題をよんだ舞踏家が、こんどはフランスのアンダーグラウンド集団の頭目とがぶっ四つの泥仕合を演じるらしい。ディディエ・マニュエル。何でも身長2メートルもある、黒人の米軍人とフランス女性の混血児らしい。難航をきわめているという、この企画直前の工藤文輝さんにこの程の意気込みなどをうかがってみた。

★＜東京戯園館プロデュース＞

工藤文輝さんに聞く

Q—貴方の周りにはよくまあ風変わりな人間が集うものですね？
A—希む希まざるにかかわらずこうなる。
Q—向こうで知り合ったのですか？
A—シャトレの「ミストラル」という飲み屋で本番終わってビールを飲んでいたら、

向こうに好奇心に目を柳かせた男がいた。10年前だ。ナンシーで「Materia Prima」という劇団をやっているという。パンフレットを見せてもらったら、荒々しい野趣のある舞踏のようだった。で翌年、ゲッチンゲンで元藤子とワークショップをしているところに現われた。

Q—共同作業をするのは始めてですか？
A—2、3度やったと思う。実は、東京でも7、8年前、六本木のバー「キャラメル」で極秘パフォーマンスを一緒にやっている。

Q—やはり飲み屋ですね（笑）。

A—飲み友達なもの。

Q—どちらがお強いですか？

A—フランス人は僕らのようにみだりには飲まんね。

Q—意地の悪いウィットを多く含む？

A—それも僕の方だ。彼は敬虔な僧侶のように、ひたむきに舞台を作っています。

Q—カンパニーワークはご寛になったのですか？

A—“Sphere”という初期作品は脳天をカチ割られるような衝撃作。

Q—近作は？

A—見ていない。DVDを送ってきたが、よりコンテンポラリーへの歩み寄りが見えるね。

Q—好きでしたか？

A—いいえ。しかし場がいい。火と血、叫び、…過剰だから劇場作がほとんどない。倉庫や野外が多い。

Q—時代と相渉るものは必要ない？

A—首都への嫉妬は共通ですね。

Q—今回の経緯をお聞かせください。

A—4年前、フェスティバルに招待してくれたお返しです。

Q—市政を巻き込んでの大きなものだったとか？

A—アングラもあそこまで行けば地上に浮き出てるね。

Q—今回ですが日本側からは万有の高田さんと蟻螂などに出ていた渡邊敬彦が出られるのですか？

A—ともに互助会をやっている。

Q—高田恵篤さんは徐々に演出に活動の重きをおいておられるとか？

A—そうはさせない。一生、演技者どうしでつき合いたい。

Q—アルトーをやろうというのは、どなたの発案ですか？

A—僕です。ディディエはアルトーが詰まらないのだと言います。

Q—おや、……。

A—既に概念を成めたアルトーが一番近い。

Q—抱負などお聞かせください。

A—ひとの本など使わないのが僕とディディエのスタンスです。「蒼穹はない」とかかわるよりもそれぞれの「残酷」を打ち出す試みでしょうか。

Q—では、その「残酷」とは？

A—目の前のすべてが不確定であるという事実を暴くこと。

Q—空もないのですか？

A—なにかもかもしれません。

Q—ありがとうございます。

A—こちらこそ、どうも。



M.S.A.collectionのスケジュールについてはP3参照

妖しい幻想世界と緊張感溢れる現代ドラマ。 タイニイアリス5月の注目公演から



Dance.Medium 舞踏公演
「THE INVISIBLE FOREST
一見えない森」
5月9日(火) 7:00会場 7:30開演
◎新宿タイニイアリス

振り付け・構成／長岡ゆり

出演／正朔、宇田川正治、小玉陽子、亀田欣昌、長岡ゆり

前売り予約／1800円 当日／2000円

このところ続いた文学ネタから離れて、長岡のオリジナルストーリーの新作です。ハイテンションで疾走するDance.Mediumのお送りする、リアルな身体による幻想の物語。

いったいここはどこだろう？

盪立する植物群に足をとられ、木々の哄笑に怯え、

戦いの気配を含んだ風邪に煽られ、舞い上がる花びらに窒息しそうになり、霧に煙る憂鬱の谷を渡り、奥深く迷い込んでしまったこの場所は？ ここが見えない森？ ある日、沸騰する獣じみた狂気と共に昇天する禁断の果実が眠るといふ…

この作品を創るにあたっては、舞踏家、役者、ジャグラー、コンテンポラリーダンサー等、様々な経歴を持つメンバーを起用し、それぞれの持ち味を生かすように振り付けを考えました。それによって作品に重層性が出ることを期待しました。生きる事や、踊る事の中に、見えない森への旅の入り口があると私は考えます。観客の皆様と共に旅ができれば最高だと思っています！



fake 「リサイクル」
5月12日(金) 19:30開演

アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場
TINY ALICE より最新ニュース

13日(土)・14日(日) 14:00、19:00
 開演 15日(月) 19:00開演
 ◎新宿タイニイアリス

前売取扱/naoki@remind-market.com
 お問い合わせ/"fake" 050-1388-6302

【ストーリー】自殺サイトで知り合った瀬崎詩織と名取清晴は練炭自殺を計るものの、運び込まれた「問宮総合病院」で一命を取り留める。しかし、意識を取り戻した二人は、都築と名乗る医師からある取引を持ちかけられる。その驚愕の内容とは…

【"fake"】1996年、福島崇之と河口さよみのユニットとして結成される。結成当初は河口の知人である脚本家の書き下ろし作品を上演していたが、1997年の第2回公演を最後に河口が脱退、それに伴い脚本の供給ルートが失い、同年の第3回公演より福島自らが脚本を担当する事となる。

処女作「箱の中の導火線」を上演後、翌年の1998年には第4回公演「はれるや」を上演と、新メンバーと共に順調に公演を重ねたが、その後活動休止に入る。

2004年、外部へ3本の書き下ろし作品を提供した事により活動再開への機運が高まり、結成10周年の今年、活動を再開。

【スタイル】結成当初からの「一幕一場、転換無し」は本作品に於いても変わる事は無く、観客が物語の進行と同じ時間を共有する事で生じる独特の緊張感が、ストレートでシンプルな感動を演出する。

カフカの作品を大胆に読み解く。 die pratzte M.S.A.コレクション開催中

hmp [In der Strafkolonie]
4/18(火) 19:30 4/19(水) 15:30&19:30
前売2500円 当日3000円 (学生500円引き要学生証) 問=090-3355-2669
@麻布ディプラッツ 作=フランツ・カフカ「流刑地にて」 構成・演出=笠井友仁 出演=臼井沙代子 高安美帆 伊藤歌枝子 砂原万記子 他

★<hmp>笠井友仁 インタビュー

Q—まずhmpについて教えてください。

A—<hmp>は1999年にドイツの劇作家ハイナー・ミュラーの戯曲「ハムレットマシーン」を上演するための研究会として結成されました。当時、私は大学生で、友人と共に教室を使い集まっていました。

Q—では劇団ではなかったんですか？

A—はい。しかし、研究は上演のために行ってしまったから、まもなく「ハムレットマシーン」を上演することになりました。そのときのタイトルは「H M」です。このときの演出はまだ私ではなく、<hmp>という名前もありませんでした。それが2回目、3回目と公演を重ねるごとに劇団となり、<hmp(ハムレットマシーンプロジェクト)>と名乗るようになりました。

Q—昨年5月、大阪現代演劇祭く仮設劇場>WAで上演された「cage」と、同じく大阪にて上演さ

れた「traveler」も、カフカの「流刑地にて」が題材になっていましたが、この二つの作品と今回の「In der Strafkolonie」の違い、または共通点を教えてください。

A—5月に上演した「cage」と10月に上演した「traveler」の違いですが、特に視点についてです。ここでいう視点とはいわゆる主人公のことですが、「cage」が囚人の視点で上演されたのに対し、「traveler」は旅行者の視点で物語が進んでいきます。「In der Strafkolonie」では、この二つの視点を同時に展開させたいと、今は考えています。今回のM.S.Aコレクションに参加する作品は、カフカを題材とした1年間のプロジェクトの集大成になるだろうと思います。

Q—ひとつ事件がいくつもの視点で語られるという上演の仕方は、カフカを読み解く面白いキーワードかもしれませんね。最後に、「traveler」を拝見してなの

新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場
DIE PRATZE より最新ニュース

ですが、息遣いを多様していましたね。

A—はい。「traveler」では、俳優の訓練のため呼吸と歩行に力を入れました。テレビ、映画、インターネット、ラジオ…多くの表現媒体の中で舞台芸術である演劇の俳優であるために非常に有効な手段だと考えています。しかし、これからはその呼吸と歩行を集団としてコントロール出来るようになれば、次の身体表現の在り方も提示していこうと思います。「In der Strafkolonie」はその第一歩になるはずですよ。

笠井友仁プロフィール

1979年生まれ。宮城県仙台市出身。
 hmp代表。演出家。近畿大学人文科学研究所研究員。日本橋の近畿大学会館をアートスペースとして通年利用する企画「リトル★シアター」をプロデュース。
 ArtTheaterdBと提携し「新世界フィジカルシアターフェスティバル」を企画・運営。日本演出者協会主催の「若手演出家コンクール2005」にて優秀賞を授賞。



die pratzte M.S.A. collection

神楽坂ディプラッツ

■Power Doll Engine「東京物語」/作:竹内統一郎

4/14(金)~4/16(日) ☆問=okudo-10@b-star.jp

■イメージオペラ>>トリプティック<<

4/18(火)&4/19(水) 18日アフタートーク有り ☆問=

03-5373-0536 「地図の作成」☆振付・ダンス=野沢英

代/「ベンツがほしい」☆演出・構成=梶原江里 ☆出演=相

良ゆみ 吉川裕子/「loveiam longest lugubru Blackdoorn」

☆振付・ダンス=脇川海里

麻布ディプラッツ

■ダンスの犬 ALL IS FULL「裂けていくvol.4」

4/11(火)☆問=047-447-0073

■マキガミックテアトリック チャクルバ2「ザウミの海で」

4/14(金)~4/16(日) 14日アフタートーク有り

☆問=0465-63-0578

■hmp [In der Strafkolonie]

4/18(火)&4/19(水)☆問=090-3355-2669 ☆作

=フランツ・カフカ「流刑地にて」 ☆構成・演出=笠井友仁

■東京戯園館プロデュース「藩穹(そら)はない!

(A・アルト一原作)

4/21(金)~4/23(日) ☆問=03-3416-3170

■発見の会「革命的ロマン主義」

5/3(水)~5/6(土) ☆作=上杉清文 ☆演出=有馬則純

■境野ひろみ「雑草花子」

5/7(日) ☆問=03-3493-1086(境野)

http://www.geocities.jp/azabubu/もご覧ください

